

だんだん俱樂部会報

女性によって守られ継承されている伝統技術がここにあり！



出雲市大津町で出雲大社で使われる土器(カワラケ)を作り続けている山代亜由美さん取材しました。

高校時代、職場体験で保育園に行き、私の将来の仕事はこれだ！と直感し、晴れて保育士の道へ。ところが好きだった仕事が結婚を機に大きく転換したのです。嫁がれた山代家は代々女性が窯を使って土器を作っている工房。ある時当時80代の芳子お祖母さんから「手伝ってくれないか？」という言葉に動かされ保育士を辞めこの世界に入られたのです。

仕事をしていると目と鼻の先にある保育園から子どもたちの元気な声が聞こえてきて辛く感じたこともあったのですが、新しい職場には姑の満子さん、義理のお姉さんの有紀さんと、4人の女性だけの本当に賑やかな、正に楽しい女性の職場に次第に魅力を感じ始められました。習いたての頃は口くわの上で粘土を吹っ飛ばしたり、下の写真にあるようにいくつかの工程がありますが、判押し作業で力加減を間違えたりと、思考錯誤の毎日。でも上手くできると褒めてもらえて本当に嬉しかったです。

男性でも大変な体力のいる仕事なので休憩時間にはしっかりとおやつも食べてエネルギー補給。最盛期には1日で1000枚も作ることがあったそうで驚きです。作業のタイミングが季節や天気でも変わります。先輩が現場から離れてからは、電気窯とガス窯を使い分け還元という技術を難しい数式とにらめっこしながら経験と勘で身に付けられました。この仕事は正に根気と体力が勝負。女性の逞しさに圧倒される思いです。最近では土器に毎日向かえるのもありがたい仕事だけど、休みの日を利用して陶器のアクセサリーにもチャレンジされ創作活動の場を広げ愉しんでいます。



ではここからは、『出雲大津窯業誌(永田鉄雄氏著)』を参考に山代さんの窯の誕生秘話を少し紐解いてみましょう。

初代は山代九一郎さん。松江にある布志名の永保山窯元で修行され地元大津に帰られ、白盛山の陶工を経て明治38年に独立、開窯され素陶器、陶器作りをされ布志名風の黄釉で火鉢などを作り全国に販売されました。工房には当時の作品が何点か残っていました。大正末期から昭和初期には研究を重ね日用品の生産を始められ、花瓶、花器、土産品まで作られ人気だったといえます。昭和初年頃は長男の春吉氏、陶器職人6〜7名、雇用人5〜6人のスタッフを抱え5室を有する登り窯1基、補助窯1基を構え

る大工房でした。ところが春吉氏が27歳の若さで病気のため亡くなられ、九一郎氏の脳卒中で倒れるという最大のピンチが訪れます。

6〜7名、雇用人5〜6人のスタッフを抱え5室を有する登り窯1基、補助窯1基を構える大工房でした。ところが春吉氏が27歳の若さで病気のため亡くなられ、九一郎氏の脳卒中で倒れるという最大のピンチが訪れます。

そして、ここで芳子さんが登場します。突然訪れた人生の転機に迷いながらもこの窯の火を消すことはできないと職人さんたちの励ましに支えられ懸命に窯を守ると努力され、夫、九一郎氏の枕元に行っては一つ一つ教えを受けられました。

やがて九一郎氏は健康を回復され仕事に復帰されました。終戦を迎え大津窯業界は困難な問題を抱えていましたが、九一郎氏は率先して地元の組合の代表と相談して県の現地指導機関設置に奔走し、自らの工房の一部を開放して県工業試験場大津試験室の実現にこぎつけられました。そして窯元を「永祥山陶園」として操業されていきましたが、再び発病、陶器窯元を廃業されることに。

正に窯の火が消えようとしていた時、芳子さんが立ち上がったのです。身に付けた技能を生かして残された補助窯で細々と土器づくりを続けられたのです。

最初は一畑業師のお茶湯や駅弁用のそばどんぶりなどを作り販売されていましたが品質の良さが買われて、出雲大社の土器を特注品として専属で生産納入されることになったのです。当時は納品のために両手に重い土器を抱えてバスで行かれたとお聞きしました。そしてその技は代々お嫁さんに受け継がれ現在の亜由美さんへとパトーンがつけられています。県内でも土器だけを作っている工房はとても珍しいと言います。この器が全国から訪れる皆さんの手に持たれると思うと心が躍ります。



最後に初めて知りましたが私の出身校でもある大津小学校の初代校長の胸像は九一郎さんが作られたもの。その堂々とした作品は今、逞しい女性の手によって窯の歴史が引き継がれていることを喜ぶかのように輝いています。

実は私の生家は山代さんの隣で、子どもの頃から窯の中に入ったり工房の敷地を走り回って遊んでいたことを今でも懐かしく思い出します。そして芳子さん、満子さんに本当に可愛がってもらい、その優しさから生まれる土器には一方ならぬ思い入れがあります。出雲大社で土器を手にするたびに想い出が蘇り感慨に耽っています。



2013年に生まれた山陰で唯一の小児心臓外科のリーダーに訊く



島根大学医学部附属病院の小児心臓血管外科医の藤本欣史先生を取材しました。

ご出身は神戸市。阪神淡路大震災の時は島根県立中央病院で手術中、突然グラツときて手術が終わってテレビを見て驚かれ、実家に電話されてもつながらず心配された経験もお持ちです。

医学部を目指された理由を直球でお聞きしましたが、明確な理由はないけど、今考えると、小学の3、4年生の頃、4か月間、小児科の専門病院で長期入院していて、その時医療従事者と接し、家族以外の人たちに優しく接してもらったことかな・・・との回答が。そして医師を目指す前は、漠然と自分の手を使った仕事がしたいという願望もあったそうです。

島根大学医学部を卒業後は京都大学医学部心臓血管外科に入局されましたが、その時の経験をお聞きしました。担当の新生児が心臓疾患で亡くなられましたが、新米の私にできることは限られていました。冷たさが忘れられず、この体験が結局のところ、専門を決めたように思います」と語られました。

平成7年に島根県立中央病院で1年間心臓外科医として勤務され、平成8年から17年間にわたり15歳以下の子どもの心臓を診る、静岡県立こども病院に勤務され小児心臓血管外科医として技術と経験を積まれましたが、子どもの心臓手術は1ミリ単位の本当に細かい手技が必要とされるとおっしゃいました。

その後2012年4月から2013年3月まで1年間、東大心臓外科で勤務され、2013年4月に島根大学医学部附属病院に心臓外科医として赴任。10月までの半年間はスタッフを一人でトレーニングして山陰で唯一の小児心臓外科開設にこぎつけられました。小児心臓手術は高度な設備や多くの専門スタッフが必須となるために、これまでの島根県のように地元で手術を受けられない、空白地域があり遠距離での家族の負担は相当なものです。山陰に1カ所あることは当事者家族にとっては正に希望の光となるのです。

手術は1歳以下が7割で体重は7〜8キロ以下の小ささ。生まれつきの心臓病は約40種類の病気があり100人に1人の確率であるとお聞きしました。今までの4年で250例を超える手術を行われましたが、ここで手術の心構えをお聞きしました。手術中は平常心を保つことが重要。そうでないと発想や経験、知識の引き出しからスムーズに出てこないとのこと。また感情を出さないことも重要なポイントで、正にメンタルトレーニングは欠かせないそうです。最長では11時間にもわたることがある手術の間はトイレにも行かず、食事、水分摂取もなしで患者さんに向かわれます。

この仕事のやりがいについて、自分が手術した子どもさんが大きくなっていく。誰かが手術したのかも分からないまま・・・そして自分が死んでもそれから先何十年も生き続けて命を繋いでくれる未来への希望。そして子どもの無垢な笑顔や入院した時の苦しむ顔から元気になって退院していく姿を見るとき喜びが一番とおっしゃいます。

第一印象は、背が高くがっちりとして小麦色に焼けた肌からかなりのアスリートと予測。尋ねるとやはり、自転車でのロードレース、登山、そして沖繩の海を中心にしたスキューバダイビングと趣味は多彩。以前はスキーもされていましたが外科医としてケガのリスクを避け封印中とのこと。沖繩の久米島、慶良間諸島の美しい海に2、30メートル潜り、薄暗い中でストロボをたいて撮影した画像に映し出された体長数センチのウミウシの美しさに現在夢中とのこと。カメラ好きの私もその言葉に触発されウミウシ探検に思わず行きたくなくなっていました。



